

碁石を呑んだ八っちゃん

有島武郎

青空文庫

八^やつちやんが黒い石も白い石もみんなひとりで両手でとつて、
股^{もも}の下に入れてしまおうとするから、僕は怒つてやったんだ。

「八つちやんそれは僕んだよ」

といつても、八つちやんは眼^めばかりくりくりさせて、僕の石ま
でひつたくりつづけるから、僕は構わずに取りかえしてやった。
そうしたら八つちやんが生意気に僕の頬^{ほっ}ぺたをひつかいた。お母
さんがいくら八つちやんは弟だから可愛^{かあい}がるんだと仰^{おっしや}有^あつたつ
て、八つちやんが頬^ほぺたをひっかけば僕だつて口^く惜^やしいから僕も
力まかせに八つちやんの小っぽけな鼻の所をひっかいてやった。
指の先きが眼にさわった時には、ひっかきながらもちよつと心配

だった。ひっかいたらすぐ泣くだろうと思った。そうしたらいい気持ちだろうと思つてひっかいてやった。八っちゃんは泣かないで僕にかかつて来た。投げ出していた足を折りまげて尻しりを浮かして、両手をひっかく形にして、黙つたままでかかつて来たから、僕はすきをねらつてもう一度八っちゃんの団子鼻の所をひっかいてやった。そうしたら八っちゃんは暫しばらく顔かお中ぢゆうを変ちくりんにしていたが、いきなり尻をどんとついて僕の胸の所がどきんとするような大きな声で泣き出した。

僕はいい気味で、もう一つ八っちゃんの頬ほぺたをなぐりつけておいて、八っちゃんの足あしもと許もとにころげている碁石ごいしを大急ぎでひつたくつてやった。そうしたら部屋のむこうに日なたぼっこしなが

ら衣物きものを縫うつていた婆ばあやが、眼鏡めがねをかけた顔をこちらに向けて、
 上眼うわめで睨にらみつけながら、

「また泣かせて、兄さん悪いじゃありませんか年かきのくせに」
 といったが、八っちゃんやんが足をばたばたやつて死にそうに泣く
 ものだから、いきなり立つて来て八っちゃんやんを抱かき上げた。婆ばあや
 は八っちゃんやんにお乳を飲のませているものだから、いつでも八っち
 やんの加勢かせいをするんだ。そして、

「おとおお可哀かあいそうに何処どこを。本当に悪い兄さんですね。あらこ
 んなに眼の下を蚯蚓みみずばれにして兄さん、御免ごめんなさいと仰おつしや有あいま
 し。仰おつしや有あらないとお母さんにいいつけますよ。さ」

誰たれが八っちゃんやんなんかに御免ごめんなさいするもんか。始めはめていいえ

ば八っちゃんが悪いんだ。僕は黙ったままで婆やを睨みつけてや
った。

婆やはわあわあ泣く八っちゃんの脊中を、抱いたまま平手でそ
つとたたきながら、八っちゃんをなだめたり、僕に何んだか小言こごと
をいい続けていたが僕がどうしても詫あやまつてやらなかつたら、とう
とう

「それじゃよう御座ござんす。八っちゃんあとで婆やがお母さんに皆
んないいつけてあげますからね、もう泣くんじゃありませんよ、
いい子ね。八っちゃんは婆やの御秘蔵ごひぞうつ子。兄さんと遊ばずに婆
やのそばにいらつしやい。いやな兄さんだこと」

といって僕が大急ひとぎで一かたまりに集めた碁石の所に手を出し

て一掴み掴もうとした。僕は太急ぎで両手で蓋ふたをしたけれども、婆やはかまわずに少しばかり石を拾って婆やの坐すわっている所に持つていつてしまった。

普段なら僕は婆やを追いかけて行って、婆やが何んといつても、それを取りかえして来るんだけれども、八っちゃんの顔に蚯蚓くわいがこれ出来ていると婆やのいつたのが気がかりで、もしかするとお母さんにも叱しかられるだろうと思うと少し位ぐらい碁石は取られても我慢する気になった。何しろ八っちゃんよりはずっと沢山こつちに碁石があるんだから、僕は威張いつていいと思つた。そして部屋まの真まんなか中に陣ちんどつて、その石を黒と白とに分けて畳の上に綺麗きれにならべ始めた。

八っちゃんは婆やの膝ひざに抱かれながら、まだ口惜くちやくしそうに泣きつづけていた。婆やが乳をあてがっても呑のもうとしなかった。時々思い出しては大きな声を出した。しまいにはその泣声なみこゑが少し気になり出して、僕は八っちゃんと喧嘩けんかしなければよかつたなあと思い始めた。さつき八っちゃんがにこにこ笑いながら小さな手に碁石を一杯いっぱい握にぎりつて、僕が入用いらないといったのも僕は思い出した。その小さな握にぎり拳こぶしが僕の眼の前でひよこりひよこりと動いた。

その中うちに婆やが畳の上に握にぎりつていた碁石をばらりと撒まくと、泣きじやくりをしていた八っちゃんは急に泣きやんで、婆やの膝からすべり下りてそれをおもちやし始めた。婆やはそれを見ると、「そうそうそうやっておとなにお遊びなさいよ。婆やは八っちゃん

んのおちやんちゃんを急いで縫ぬい上あげますからね」

といいながら、せつせと縫ぬい物ものをはじめた。

僕はその時、白い石で兎うさぎを、黒い石で亀かめを作ろうとした。亀の方は出来たけれども、兎の方はあんまり大きく作ったので、片方の耳の先きが足りなかった。もう十ほどあればうまく出来るんだけれども、八つちゃんが持つていってしまったんだから仕方がない。

「八つちゃん十だけ白い石くれない？」

といおうとしてふつと八つちゃんの方に顔を向けたが、縁側の方を向むて碁石をおもちやにしている八つちゃんを見たら、口をきくのが変になった。今喧嘩したばかりだから、僕から何かいい出

してはいけなかった。だから仕方なしに僕は兎をくずしてしまつて、もう少し小さく作りなおそうとした。でもそうすると亀の方が大きくなり過すぎて、兎が居眠りしなくても亀の方が駈かけつこに勝かちそうだった。だから困こつちやつた。

僕はどうしても八っちゃんに足らない碁石をくれろといいたくなつた。八っちゃんはまだ三つですぐ忘れるから、そういつたら先刻さつきのように丸い握拳こぶしだけうんと手を延ばしてくれるかもしれないと思つた。

「八っちゃん」

といおうとして僕はその方を見た。

そうしたら八っちゃんは婆ばあやのお尻しりの所で遊んでいたが真ま赤かな

顔になつて、眼に一杯涙をためて、口を大きく開いて、手と足を一生懸命にばたばたと動かしていた。僕は始め清せい正しょう公こう様さまにいるかったいの乞食こじきがお金をねだる真似まねをしているのかと思つた。それでもあのおしやべりの八っちゃんやんが口をきかないのが変だつた。おまけに見ていると、両手を口のところにもつて行つて、無理に口の中に入れようとしたりした。何んだかふぎけているのではなく、本氣の本氣らしくなつて来た。しまいには眼を白くしたり黒くしたりして、げえげえと吐はきはじめた。

僕は氣味が悪くなつて来た。八っちゃんやんが急に怖こわい病氣になつたんだと思ひ出した。僕は大きな声で、

「婆ばや……婆ばや……八っちゃんやんが病氣になつたよう」

と怒鳴どなってしまった。そうしたら婆やはすぐ自分のお尻の方をふり向いたが、八っちゃんの肩に手をかけて自分の方に向けて、急に慌あわてて後うしろから八っちゃんを抱いて、

「あら八っちゃんどうしたんです。口をあけて御覽ごらんなさい。口をですよ。こつちを、明あかるい方を向いて……ああ碁石を呑んだじやないの」

というと、握り拳をかためて、八っちゃんの脊中を続けさまにたたきつけた。

「さあ、かーつといってお吐きなさい……それもう一度……どうしようねえ……八っちゃん、吐くんですよう」

婆やは八っちゃんをかつきり膝の上に抱き上げてまた脊中をた

たいた。僕はいつ来たとも知らぬ中に婆やの側に来て立ったまま
で八つちゃん顔を見下みおろしていた。八つちゃん顔は血が出るほ
ど紅あかくなっていた。婆やはどもりながら、

「兄さんあなた、早くいつて水を一杯……」

僕は皆まで聞かずに縁側に飛び出して台所の方に駈かけて行つた。
水を飲ませさえすれば八つちゃんの病気はなおるにちがいないと
思った。そうしたら婆やが後うしろからまた呼びかけた。

「兄さん水は……早くお母さんの所にいつて、早く来て下さいと
……」

僕は台所の方に行くのをやめて、今度は一生懸命でお茶の間の
方に走つた。

お母さんも障子を明けはなして日なたぼっこをしながら静かに縫物をしていらした。その側で鉄瓶そば てつびんのお湯がいい音をたてて煮えていた。

僕にはそこがそんなに静かなのが変に思えた。八っちゃんの病気はもうなおっているのかも知れないと思った。けれども心の中は駆けつっこをしている時見たいにどきんどきんしていて、うまく口がきけなかった。

「お母さん……お母さん……八っちゃんがね……こうやっているんですよ……婆やが早く来てって」

といつて八っちゃんのしたとおりの真似まねを立ちながらして見せた。お母さんは少しだるそうな眼をして、にこにこしながら僕を

見たが、僕を見ると急に二つに折っていた背中を真直まっすぐになさつた。

「八っちゃんがどうかしたの」

僕は一生懸命真面目まじめになって、

「うん」

と思い切り頭を前の方にこくりとやった。

「うん……八っちゃんがこうやって……病気になったの」

僕はもう一度前と同じ真似をした。お母さんは僕を見ていて思わず笑おうとなさったが、すぐ心配そうな顔になって、大急ぎで頭にさしていた針を抜いて針さしにさして、慌あわてて立ち上って、前かけの糸くずを両手ではたきながら、僕のあとから婆やのいる

方に駈けていらした。

「婆や……どうしたの」

お母さんは僕を押しつけて、婆やの側に来てこう仰おっしゃ有った。

「八っちゃんがあなた……碁石でもお呑のみになったんでしようか
……」

「お呑みになったんでしようかもないもんじやないか」

お母さんの声は怒った時の声だった。そしていきなり婆やから
ひったくるように八っちゃんを抱き取って、自分が苦しくつた
まらないような顔をしながら、ばたばた手足を動かしている八っ
ちゃんをよく見ていらした。

「象牙ぞうげのお箸はしを持って参まいりましょうか……それで喉のどを撫なでますと

……」婆やがそういうかいわぬに、

「刺とげがささったんじやあるまいし……兄さんあなた早く行つて水を持っていらつしやい」

と僕の方を御覽ごらんになつた。婆やはそれを聞くと立上つたが、僕は婆やが八つちゃんをそんなにしたように思つたし、用は僕がいいつかつたのだから、婆やの走るのをつき抜ぬけて台所に駈けつけた。けれども茶碗ちやわんを探してそれに水を入れるのは婆やの方が早かつた。僕は口惜くやしくなつて婆やにかぶりついた。

「水は僕が持つてくんない。お母さんは僕に水を……」

「それどころじゃありませんよ」

と婆やは怒つたような声を出して、僕がかかつて行くのを茶碗

可愛そうでたまらなくなつた。あんなに苦しめばきつと死ぬにちがいないと思つた。死んじやいけないけれどもきつと死ぬにちがいないと思つた。

今まで口惜しがっていた僕は急に悲しくなつた。お母さんの顔が真蒼まつさおで、手がぶるぶる震えて、八つちゃんの顔が真紅まつかで、ちつとも八つちゃんの顔みたいでないのを見たら、一人ぼつちになつてしまったようで、我慢のしようもなく涙が出た。

お母さんは僕がベそをかき始めたのに気もつかないで、夢中になつて八つちゃんの世話をしていなかつた。婆ひざやは膝をついたなりに覗のぞきこむように、お母さんと八つちゃんの顔とのくつつき合つているのを見おろしていた。

その中に八っちゃんうちが胸にあてがっていた手を放して驚いたよ
うな顔をしたと思つたら、いきなりいつもの通りな大きな声を出
してわーっと泣き出した。お母さんは夢中になつて八っちゃんを
だきすくめた。婆やはせきこんで、

「通りましたね、まあよかつたこと」

といつた。きつと碁石がお腹なかの中にはいつてしまつたのだろう。
お母さんも少し安心なさつたようだった。僕は泣きながらも、お
母さんを見たら、その眼に涙が一杯たまつていた。

その時になつてお母さんは急に思い出したように、婆やにお医
者さんに駆けつけようにと仰有つた。婆やはびよこびよこと幾い
度も頭くどを下さげて、前まえ垂だれで、顔をふきふき立つて行つた。

泣きわめいている八っちゃんをあやししながら、お母さんはきつい眼をして、僕に早く碁石をしまえと仰有った。僕は叱しかられたよ
うな、悪いことをしていたような気がして、大急ぎで、碁石を白
も黒もかまわず入れ物にしまつてしまつた。

八っちゃんは寢床の上にねかされた。どこも痛くはないと見え
て、泣くのをよそうとしては、また急に何か思い出したようにわ
ーつと泣き出した。そして、

「さあもういいのよ八っちゃん。どこも痛くはありませんわ。弱
いことそんなに泣いちやあ。かあちゃんがやさしくおさすりしてあげます
からね、泣くんじやないの。……あの兄さん」

といって僕を見なすつたが、僕がしくしくと泣いているのに気

がつくと、

「まあ兄さんも弱虫ね」

といいながらお母さんも泣き出しなされた。それだのに泣くの
を僕に隠して泣かないような風ふうをなさるんだ。

「兄さん泣いてなんぞいないで、お坐蒲団ざぶとんをここに一つ持って来
て頂戴ちようだい」

と仰有った。僕はお母さんが泣くので、泣くのを隠すので、な
お八っちゃんが死ぬんではないかと心配になつてお母さんの仰有
るとおりにしたら、ひよつとして八っちゃんが助かるんではない
かと思つて、すぐ坐蒲団を取りに行つて来た。

お医者さんは、白ひげい鬚の方ではない、金縁きんぶちの眼がねをかけ

た方のだった。その若いお医者さんが八つちゃんのお腹をさすつたり、手くびを握ったりしながら、心配そうな顔をしてお母さんと小さな声でお話をしていた。お医者さんの帰った時には、八つちゃんは泣きづかれにつかれてよく寝てしまった。

お母さんはそのそばにじつと坐^{すわ}っていた。八つちゃんは時々怖^こわい夢でも見ると見えて、急に泣き出したりした。

その晩は僕は婆やと寝た。そしてお母さんは八つちゃんのおそばに寝なされた。婆やが時々起きて八つちゃんの方に行くので、折^せつかく角眠りかけた僕は幾度も眼をさました。八つちゃんがどんなになつたかと思うと、僕は本当に淋^{さび}しく悲しかった。

時計が九つ打つても僕は寝られなかった。寝られないなあと思

っている中うちに、ふつと気が附ついたらもう朝になっていた。いつの間まに寝てしまったんだろう。

「兄さん眼がさめて」

そういうやさしい声が僕の耳みみもと許もとでした。お母さんの声を聞くと僕の体はあたたかになる。僕は眼をぱっちり開いて嬉うれしくつて、思わず臥ねがえりをうって声のする方に向いた。そこにお母さんがちやんと着がえをして、頭あたまを綺麗きれいに結いつて、にこにことして僕を見詰めていらした。

「およろこび、八っちゃんがね、すっかりよくなつてよ。夜中にお通じがあつたから碁石が出て来たのよ。……でも本当に怖こわいから、これから兄さんも碁石だけはおもちゃにしないで頂戴ね。兄

さん……八っちゃんが悪かった時、兄さんは泣いていたのね。もう泣かないでもいいことになったのよ。今日こそあなたがたに一番すきなお菓子をあげましょうね。さ、お起き」

といて僕の両脇に手を入れて、抱き起おこそうとなさった。僕はくすぐ擦ったくつてたまらないから、大きな声を出してあははあははと笑った。

「八っちゃんが眼をさしますよ、そんな大きな声をする」といってお母さんはちよつと真面目まじめな顔をなさったが、すぐそのあとからにこにこして僕の寝間着を着かえさせて下さった。

青空文庫情報

底本：「一房の葡萄 他四篇」岩波文庫、岩波書店

1988（昭和63）年12月16日改版第1刷発行

底本の親本：「一房の葡萄」叢文閣

1922（大正11）年6月

入力：鈴木厚司

校正：地田尚

2000年10月18日公開

2005年11月18日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

碁石を呑んだ八っちゃん

有島武郎

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>